

『キリストに倣う“教会”』 (要旨)

聖書箇所：Ⅰテサロニケ 1:6~10

今週の聖句：Ⅰテサロニケ 1:6

はじめに

私たちが日常的にしていることが、他の国で同様に理解されるとは限りません。

私たちは、自分が生活する地域の慣習や身近な人々の習慣を無意識に模倣することもあれば、他の人々の習慣に影響を及ぼすこともあります。

1. 私たちに、そして主に倣う

(1) 使徒パウロの勧め

パウロはたびたび手紙の中で、「私に倣う」よう勧めました(参考:Ⅰコリント 4:16, 11:1)。この「倣う」というギリシャ語は、模倣することを表します。パウロの生きた時代の教育では、学習者は教師を模倣しました。パウロは「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい」(Ⅰコリント 11:1)と勧めます。

(2) キリストに倣うとは

パウロは自らを「キリストに倣う者である」と言います。しかし彼はイエスの直弟子の使徒とは異なり、直接イエスと顔を合わせてはいません。いかにキリストに倣ったのでしょうか。彼のキリストとの出会いを確認してみましょう。

パウロは、キリスト信者迫害の先頭に立っていた人物でした。しかしダマスコ途上で天からの光に倒され「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声を聞き、その声の主が復活のイエスであることを知ります。それがきっかけとなり、彼は回心します。その後、使徒となったパウロは言います。「私が宣べ伝えた福音は…人間から受けたのではなく…ただイエス・キリストの啓示によって受けた」(ガラテヤ 1:11-12)のだと。しかし、直接キリストから学ぶということは、他の使徒を意に介さず、独自路線をひた走ることではないようです。彼は先に使徒になった者たちと同じ教えを受けたと言います。「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって」と。他の使徒がすでに継承したものを「…月足らずで生まれた者のような私(パウロ)」(Ⅰコリント 15:3,8)も受け入れたのだと言うのです。

▷「私たち(パウロ)に倣う」とは、使徒たちのシンパとなることではありません。使徒たちに

よって伝えられたみことばを「聖霊による喜びをもって…受け入れ」、そのみことばに応答して生きることなのです(参照:Ⅱコリント 6:10,7:4)。

2. 苦難の中でも喜ぶ

「多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ…」(6)

キリストに倣う人には、苦難の中にあっても喜ぶという特徴があります。パウロは苦難が過去のものとなったから喜ぶのではなく、苦難の中にあっても喜ぶと言います。しかもこうした苦難は、イエス・キリストを信じることによって生じた苦難でもあります。

「使徒たちは、御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら…」(使徒 5:41)
▷喜びのわけ:キリストを信じる者として自らの置かれた環境を見つめ直すことで生まれる自由。

3. すべての信者の模範に

テサロニケ教会の「キリストに倣う」信仰は、他の信者にも影響を及ぼしました。彼らは、キリスト信者として、どのように生きるべきかを他の信者に示しました。そのためあえてパウロたちが伝えなくても、信者の間で口コミのように伝わって行きました。彼らにとって信仰生活を送ることは困難がつきまといました(2:14)。しかし困難に直面しても、彼らは信仰を守り抜きました(1:9-10)。それが「すべての信者の模範」となったのです。

【勧め】

キリストを信じる者たちは、互いに関わり合うことで、独り善がりの信仰に陥っていないかを問い直すことができます。しかしそれは、信者同士が、互いにストレスを感じずに済むよう同化を目指すことではありません。テサロニケ教会の信者は、みことばを聖霊によって受け入れることで、キリストに倣う者となり、すべての信者の模範となりました。教会の目標は“キリストに倣う”ことなのです。

